

戴逸主編『18世紀的中国与世界』
——18世紀の中国を世界史の座標軸で考える——

華立

1

昨年の6月、清史学界のみならず中国史学界の重鎮である戴逸教授主編による『18世紀的中国与世界』（全9冊、瀋陽：遼海出版社、1999年）が刊行された。各冊1巻からなり、『導言』巻に『政治』『軍事』『辺疆民族』『農民』『經濟』『社会』『思想文化』『对外關係』などの8巻がつづく。黒と赤がコントラストをなす雅やかな装丁、全9冊という重厚なボリューム、戴逸教授及び中堅研究者が参加した11名の執筆陣。この大著を落手したとき、さすがにその重みを感じざるを得なかった。

表紙の説明にも示されているように、本書の基礎をなす研究は1992年、中国の国家社会科学研究基金（「八五」重点項目）の補助を受けて発足した同名のプロジェクトである。研究活動の拠点は当初より中国人民大学清史研究所に設けられ、メンバーも清史研究所の教授陣が主体となっている。それから8年間、プロジェクト参加者全員の努力により、ついにこの大著が世に問われるに至ったのである。

18世紀の中国とは、清代の全盛期、すなわち康熙・雍正・乾隆の3皇帝の治世にあたる。近年熱気に包まれる清代史研究において、この時期に関する研究がもっとも活発で、さまざまな成果が多数発表されている。ところが本書のように、研究の視点を18世紀という時期に据え、その百年間における中国の諸現象を、中国以外の世界と対比しながら検証する、いわゆる18世紀を研究の枠組みとする着想は、過去に例をみない斬新な試みであるといえよう。

ではなぜ清代中国の特質を把握するのに18世紀という枠組みが重要なのか、視点を変えれば、中国史および世界史における18世紀とはどのような特徴を有する時代であったのか、研究の基調にかかわる上記の問題について、戴逸教授が執筆する本書の総論にあたる『導言』巻が巨視的見地から捉えている。以下でその論旨の要点をまとめてみることにする。

(1) 18世紀は「世界歴史の分水嶺」であり、「人類の歴史における偉大な転換点」（1-2頁）である。

この百年間に欧米諸国で起きたイギリスの産業革命、フランス革命、アメリカの独立戦争による建国など一連の出来事が、人類文明史上の革命的な変革を導き、農業社会から工業社会への

躍進が実現された。この変革の衝撃波は西半球から東半球へと走り、それにつれて東方と西方との古来のバランスが崩れ、世界全体の進展方向に画期的な変化がもたらされた。

- (2) 18世紀の歴史を貫く最重要テーマは「近代化の問題」、すなわち「伝統社会から近代社会への邁進」(6頁)ということである。19世紀以降の各国の発展過程を規定する諸要素が100年前の18世紀にはほぼ孕まれており、その様相によって各国の近代化の形態、進展の遅速、受ける阻害の度合いなどが大幅に異なっている。18世紀中葉に頂点に上り詰め、東方の大国として強盛と繁華を世界に誇った清代中国は、なぜその後近代化の潮流に乗り遅れ、ついに欧米諸国に追い越されてしまったのだろうか。中国近代史の研究者たちが問い続けてきたこの問題を本格的に解明してゆくためには、近代史の原点となる18世紀の中国と世界に立ち戻って再検証作業を行わなければならない。
- (3) 中国史研究は従来、世界史と切り離して別個に行われる傾向が強かった。しかし「ある時代、ある地域の歴史をより深く理解するためには、時間と空間の制約を超越し、研究対象をより広い範囲に」において考察することが大切である。中国は世界の一部である。「中国を世界史の座標軸に置くことによって、はじめて中国の位置と状況の真相を確認することができる」(2頁)。東西の両世界が急速に接近してくる18世紀では、中国と世界との連動が一段と強まり、双方の関連性を抜きにして考察することはもはや成り立たなくなっている。もちろん比較には縦方向と横方向との2つの方向性がある。縦軸で清代の事象を前代史と比較した場合、主に過去より優れた側面が目映えるのに対して、横軸で急速な変革を遂げつつあるヨーロッパとの比較を行うと、清代中国が抱える最大の欠陥、メカニズムに内在する封建性、保守性がくっきりと浮かび上がる。それはまさしく、資本主義の青春期の西方と封建主義の晩年期の中国という格差である。
- (4) 18世紀の研究を提唱するこのアプローチは、けっしてそのなかの中国と世界を同レベルに列して取り扱うことではない。研究の重心はあくまでも18世紀の中国に据え置き、可能な限り外部の世界と対比しながら考察を行うという方針で進める。18世紀の中国において、なにが近代化を促す要素であったのか、反対になにが近代化を妨害する要素であったのか、これらの問題に解答を見出すには、多方面にわたるミクロな観察と分析が不可欠である。そこで本書は、『導言』巻以下に8巻の各論を設け、農業・手工業・市場・経済区域・階級・都市・政治・軍事・辺疆・思想文化・科学技術・対外関係などの諸方面についてそれぞれの実像を具体的に検討してゆくことにする。

さてここで一つの興味深い現象について触れておきたい。本書を生み出すプロジェクトと共通する発想をもち、18世紀のヨーロッパをテーマとする研究を提唱する動きが、20世紀の80年代にヨーロッパの歴史学界にすでに台頭していた。のちにそれが学問の一分野に発展して、「18世紀学」と称されるようになった。今は本部をオランダのアムステルダムにもつ18世紀研究会がそのイニシアティブをとっている。はじめ別々に研究活動を展開していた中国とヨーロッパの研究者たちは今や、互いに交流を進め、親密な連携関係を結んでいる。1992年以来、当プロジェクトの関係

者がヨーロッパで開催される国際18世紀研究会の定例大会にたびたび出席しており、他方1995年北京で開かれた国際シンポジウム「18世紀の中国と世界」には、国際18世紀研究会会長のJochen Schlobach氏が出席し講演した。これらの活動の成果を受けて、中国18世紀研究会が正式に結成されるに至り、上記シンポジウムの閉会式の席で設立宣言が発表された。Jochen Schlobach氏は本書の序言も自ら執筆し、その中で本書の出版および18世紀研究の意義について、「国際18世紀研究会の趣旨は、世界各国におけるあらゆる18世紀の文化遺産に関する研究を促進、またはその活動を調和させることである。このような文化遺産には歴史・哲学・思想・宗教・言語・文学・科学・芸術と法律の諸分野が含まれる。……（本書）の出版は中国研究者の当該時代に関する研究を大幅に促進するに違いない。つまり、現代に対するこの時代の重要性和価値は、決してヨーロッパのみに限られるものではない」（『導言』巻、1-2頁）と語っている。「18世紀学」研究の発展は今後も大いに期待できると思われる。

2

『導言』巻以下の8巻は次のように構成されている。紙面の関係で各巻名、執筆者名および書中各章の標題についてのみ紹介しておく。

政治巻 郭成康撰

緒言

第一章 18世紀極端専制政體的強化と完備

第二章 専制主義中央極權的強化

第三章 18世紀後期政治的腐敗

第四章 千秋功罪

軍事巻 戴逸・張世明撰

緒言

第一章 軍事思想與大戰略

第二章 清政府軍隊建設的得失與成敗

第三章 軍事經濟探析

第四章 武器裝備差異的比較研究

第五章 海上武裝力量的類史反思

第六章 驅準保藏與綏服青海

第七章 雍正朝對準噶爾的戰爭

第八章 乾隆朝對準噶爾・回部的戰爭

第九章 金川戰爭

第十章 驅廓保藏戰爭

邊疆民族卷 成崇德撰

緒言

第一章 18世紀中俄美疆域形成的比較

第二章 18世紀清朝對邊疆的統一

第三章 18世紀清朝的疆域

第四章 18世紀清朝對邊疆的管理及其政策

第五章 18世紀清朝邊疆的人口流動與美國的“西進運動”

第六章 18世紀中美邊疆開發的比較

農民卷 徐浩撰

緒言

第一章 18世紀中英農民與農村經濟的比較

第二章 18世紀中英農村生產關係的比較

第三章 18世紀中英農村商品經濟的比較

第四章 18世紀中英農民生產生活的比較

第五章 18世紀中英農民反抗鬥爭的比較

經濟卷 陳樺撰

緒言

第一章 18世紀的中國社會

第二章 經濟發展的不平衡性

第三章 18世紀中國的經濟區域及其特徵（上）

第四章 18世紀中國的經濟區域及其特徵（下）

第五章 18世紀中國的國家財政收入

第六章 非常項經費的支出與籌措

第七章 中央財政與地方財政

社會卷 秦寶琦、張研撰

緒言

第一章 18世紀的社會環境：從“人口”問題切入（上）

第二章 18世紀的社會環境：從“人口”問題切入（下）

第三章 18世紀的社會結構：群體·社區·組織（上）

第四章 18世紀的社會結構：群體·社區·組織（中）

第五章 18世紀的社會結構：群體·社區·組織（下）

第六章 18世紀的“第二個世界”：非常態社會組織

第七章 18世紀的社會“精英”：領導基層運行的階層

思想文化卷 黃愛平撰

緒言

第一章 清朝政府的文化政策

第二章 漢學的興盛

第三章 傳統文化的總結與發展

第四章 異端思想的萌芽

第五章 經世思想的崛起

第六章 中西文化交流的跌落

第七章 18世紀中西世界觀念的差異與評價

對外關係卷 吳建雍撰

緒言

第一章 清前期的對外政策與行商制度

第二章 清朝與歐洲主要國家的通商

第三章 清代中國的主要出口商品

第四章 清代中國的主要商品和白銀

第五章 鴉片走私

上記の通り、各論としての8巻は18世紀における中国の事象を主軸に、ジャンル別で構成されている。8巻の構成において、従来の研究でも大きく取り上げられた政治・経済・思想文化・社会の諸巻と並んで、辺疆民族・農民・軍事などの方面にも多くの紙数が割かれ、単独の巻をなしていることが、大きな特徴といえよう。こうした構成をめぐる新機軸は、著者たちが主張する18世紀中国史の研究構想を示すものとしても受け止められる。執筆の担い手についてみると、プロフィール記載の通り、当該分野の各々に精通し、手堅い実績をあげてきた研究者による強力な陣容であることも明らかである。さらに各巻の内容を吟味すると、多くの文献・檔案史料を駆使する微視的研究が大半を占める一方、ミクロな視点にとどまることなく、史実の総括、理論面の再構築に向けての論議も豊富に盛り込まれている。一つのシリーズとして、各巻の論旨に一貫性があると同時に、巻中における問題の提起、資料の取捨、分析手法の運用などにおいては、執筆者各自の個性が生かされており、まさに多彩である。また、各巻の冒頭に設けられた「緒言」を一読すれば、直ちに当巻の要旨を把握することができる。すなわち『導言』巻を含む9巻を1セットと考えれば、統合された一大著となり、各巻を個別の著作と考えれば、それぞれが体系の整った当該分野の専門書となるといえることができる。

ここで各論の内容についてももう少し詳しく触れておく必要があるが、紙面の関係と評者自身の能力により、その範囲を大幅に制限せざるをえない。ここでは主に、『政治』『辺疆民族』の2巻を具体的に取り上げ、本書の特色の一端を垣間見ることにしたい。

『政治』巻執筆の郭成康氏は1980年代に『清入関前国家法律制度史』『清代文字獄』という2冊の労作を出版しており、その後、史料集である『清史編年 乾隆朝』(上)(下)の編纂にたずさわって、乾隆朝の政治問題を研究テーマとしてきた。当巻において氏は自らの研究蓄積を土台に、「18世紀中国政治の最大の特徴」を連続する康熙・雍正・乾隆の3代の「極端な専制政体の強化と完備」(『政治』巻、30頁)という点に見出し、清初以来の中央集権体制の強化過程、政治体制における皇帝権力の極端な膨張の実態およびその要因を、多面的に検証・分析した。

まず第1章では、順治期から雍正期に至る清朝中枢の行政組織の変遷を、内三院と内閣の時代→内閣と議政王大臣会議の時代→軍機処時代という軸に沿って辿り、軍機処の成立による「乾綱独断」(国政に対する皇帝の独裁)体制の成立過程に対して段階的にアプローチした。また、その過程にみられる清代独自の奏摺制度の発展を、偶然の現象ではなく、皇帝権力の膨張に同調した、言いかえれば前者の需要に応じて創出されたものであると指摘した。第2章では、高度な君主専制体制のもとで作られた行政システムとその運営実態に関する検証作業が行われている。氏は権力中枢を代表する部院と地方の最高長官である総督・巡撫との間に敷かれた行政の分担構造、皇帝による内外官僚群に対する統制と監督、総督・巡撫に与えられた地方財政・人事の権限とその変化、中枢政策決定機関の権威と中央に対する地方有力官僚の影響力を、各側面から動態的に考察し、そこに見られる行政権の分割と統合のメカニズムについて政治学理論に基づく解釈を試みた。第3章は18世紀後半の国家政体に癒着した持病——政治の腐敗に、焦点を当て、次々と露呈する重大な案件を取り上げて分析し、その原因を①制御なき独裁君主の暴走、②総督・巡撫級官員の過大な権限、③法律上の不備と誤り、④社会風習の乱れ、⑤士大夫の道德心喪失などに求めた。

第1章から第3章にかけて考察の視点がもっぱら清代中国の内部に集中しているのに対して、総括にあたる第4章では、同時期の世界という新鮮な視角を取り入れた。ただそれは、あくまでも18世紀ヨーロッパ諸国の目に映った中国という視点にとどまり、政治制度の諸相を比較するには及ばなかった。最後に、18世紀の中国政治の利害得失について氏は、「18世紀に極端な専制体制の頂点に達したこの政体には、その発展をなし遂げられる内在的な要因」(『政治』巻、402頁)があったばかりではなく、それを作り出す社会的環境も18世紀の中国に存在した、つまりこのような君主独裁体制の成立には歴史的「合理性」があった、と論評する一方、世界的な近代化の流れに立ってみれば、18世紀の中国における専制政治の過剰膨張は自国の近代化を妨害する作用を及ぼした側面も認めるべきであるとして、この事象を2つの側面から捉える見方を示唆した。

『政治』巻の手法と異なり、『辺疆民族』巻は中国と西方世界との比較を書中の重要な一部とし

て組み入れている。18世紀に清朝が領有する版図は最大に達し、周辺諸民族に対する管轄体制もかつてないほど整ったとされる。他方、ほぼ同時代にロシアはシベリアへの進出、アメリカは「西進運動」と呼ばれる西部地区への拡張・開発活動などが勢いを見せている。執筆者の成崇徳氏はこれまで清朝の边疆統治政策および边疆開発史をめぐる多くの研究成果を発表しているが、そのなかで上記のロ・米両国の边疆情勢についてもしばしば論及している。当巻では18世紀中国の边疆事情を、①清朝の「大一統」边疆観と統合の過程（第1・2章）、②18世紀における清朝版図の確定とその領域（第3章）、③清朝の边疆管理制度（第4章）、④边疆への人口移動と現地の経済開発（第5・6章）の諸テーマでとりあげ、考察・分析の作業を体系的に行う一方、中国・ロシア・アメリカの边疆事象をめぐる比較研究を第1・3・6の3つの章において積極的に試みた。冒頭で氏は「同じ歴史時期において、中国・ロシア・アメリカの3国はいずれも自らの边疆地帯で重要な事業を推し進めた。しかし社会的背景や、推進する原動力が異なるのに加えて、実施モデルの類型や方法・手段も相違しているので、当然ながら結果も大いに異なってしまった」（『边疆民族』巻、1頁）と語り、比較の狙いは18世紀中国の边疆経略の性格、その過程に帯びた西方諸国と相異なる特質を明らかにすることにあると言明した。

ちなみに構成の関係で、対ジュンガル部戦争をはじめ、統一推進の過程に起こった一連の戦争のことは、『軍事』巻に委ねられている。そのため当巻中では政治・社会・経済開発の関連事項を主に取り扱っている。評者の興味を惹いた点について触れておくと、まず第1章のなかで、前近代中国の疆域形成問題に纏わる諸説の再検討を行い、その上で清朝の边疆観は「大一統」思想による边疆統一論であると特徴づけていることである。氏によれば18世紀の中頃、清朝は歴代中原王朝の疆域を継承すると同時に、歴史上各周辺民族の活動地域をも広く領有し、これによって当初目指していた「大一統」の目標が達成されたという。この見解こそ当巻の基調を理解するための重要な点であるといえよう。ほかにも、第2章において边疆統一の過程におかれた台湾、ハルハモンゴル部、チベット、ジュンガル部のことを4つのモデルとして分類し、各過程を左右した種々の要素に対して深い分析を行っていること、また第4章において、「因俗而治」の原則を掲げる清朝の边疆管理システムの特色を、「行政管理制度」「边防管理制度」「边疆民族制度」のジャンル別に整理し、その全容をより明確に描き上げていることなどにも、氏の独自の見地が窺われる。

18世紀中・ロ・米の3国の边疆経略の比較を通して、氏は次のような見解を提示している。第1に、清代中国の边疆経略は同時期の西方諸国の拡張的・殖民的活動と性質が異なっている。第2に、清代中国の疆域形成には中国史における歴史的な発展の経緯がある。その史実を視野に入れることは清代の边疆事情を理解するために不可欠である。アメリカの边疆は「移動边疆」、清代中国の边疆は「固定边疆」という捉え方の根拠はここにあるのである（『边疆民族』巻、32-33頁）。第3に、边疆経略に付随する人口の流動と現地社会の開発は、地理的環境、労働力の状況、政府の対策、資金と技術などの面における相異によって、結果に大きな格差が生じる。今後も边疆地域の開発事業を行っていかねばならない中国にとって、自国の歴史のみならず、他国の歴史からも教訓を汲み入れることが必須である。

戴逸教授が『導言』巻のあとがきに語っているように、本書の最大の特徴は「18世紀中国史の展開をパノラマ的に描写しようと試みた」ことである（『導言』巻，116頁）。したがって全9巻のこの大著は、一般の実証的研究とも、また単なる理論的研究とも異なり、「史」と「論」の結合および中国史と世界史の結合を目指す一種の新しい著述形式を創出している。いうまでもなく、このように斬新な課題に挑むことには、予想もつかないさまざまな困難に直面する可能性がある。論述に利用しうる先行研究の欠如或いは不足、学際的研究をおこなう研究者個人に求められる広範な知識と洞察力、これらを克服するためになされた著者たちの苦心の数々が、書中から生々しく伝わってくる。道が開かれれば続く者も輩出されるであろう。今後、より多くの研究者が加わり、このような課題の研究がいつそう活発化していくことが予想される。そのような状況を心から期待するとともに、先駆者である本書の著者らの寄与を高く評価したい。

（大阪経済法科大学教養部）